

美術の日本化

'90年美術雑感

翁長 直樹

今年もまた日展が鳴り物入りで開催された。日展に関しては、その権威主義と天皇制的ヒエラルキーの団体が主催する展覧会であり、日本の美術受容のあり方が良く見えるという意味で極めて象徴的だとされる。沖縄の作家側からも多くの批判が聞こえたが、連日の報道は賛美一色で、沖縄の社会では一般的に地元の作品より上位、序列化の頂点に置かれたようだ。その意味で美術の日本復帰、日本国家による沖縄の支配、再編化過程の一步であろう。政府主導による芸術政策を明治政府はすすめたのであるが、日展はあからさまにお上の発想と構造を持っている。このようないびつな美術受容の仕方と発展は日本のみであり、多かれ少なかれほとんどの団体展は日展をモデルとしている。西洋の19世紀から21世紀にかけてモダニズムが苦闘してきた成果が日展には皆無であり、主催者はそのことを心に留めておくべきだろう。

復帰後沖縄の美術界も徐々に変わってきたのだが、この3、4年は大きな変化の時期と言えよう。特に今年の浦添美術館の開館と琉石美術賞などは美術界に様々な影響を与えたと言える。しかし内実は先程の日展同様、美術の制度を強化するものでしかなく、権威主義、事大主義以外の何物でもなかった。

浦添美術館は自前の企画を何ひとつせず、新聞社主催の展覧会や移動展で間に合わせたり、団体展を催したりと、安易で「大樹の下」的発想ではないだろうか。時代に合わせた、「今を切り取って見せる」企画や、美術史を掘り起すような企画こそ望みたい。琉石美術賞は県内の美術家に様々な期待を抱かせたが、フタを開けてみると企業の意図のようなものが

やたら目について、これが「創設者の意志」を継ぐものなのかという失望が大きかった。企業が積極的に文化に関わるのは大いに結構であるし、当然すべきであるが、往々にして日本の場合、営利に再還元してしまう。これはアメリカでは絶対に批難されるべきで企業が文化に関する場合、非営利目的、地域社会へのサービスという理念を持っており、絶対に直接的に自社利益に

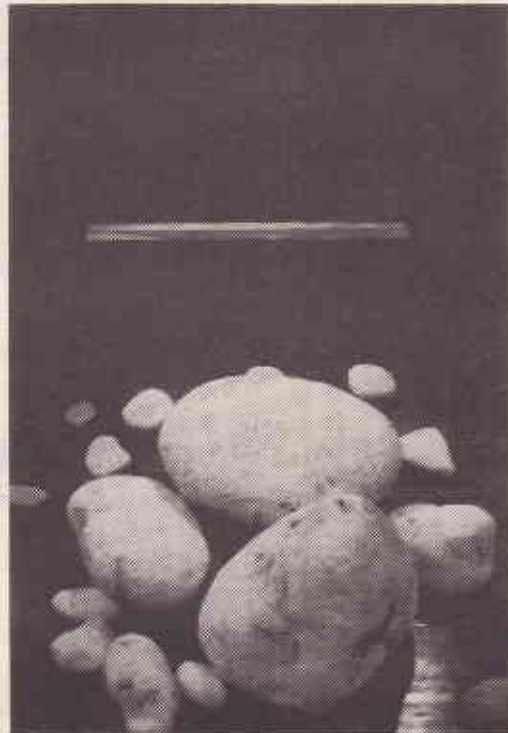
つながるとを戒めているものである。それが逆に地域での企業イメージのアップにつながり、間接的な形で利益になるものだ。今日、日本における様々なイベントや企業の文化事業を取り仕切っている広告代理店は表面を華やかに見せ宣伝効果はあるにしても肝心の文化の中身についての吟味や向上などには関心が薄いのではないか。琉石はもっと深く地元の文化や芸術について考え、長きに渡って

継続していけるよう、足が地についた方法を考えるべきだ。しっかりしたブレインを置いて、スマートな真に芸術家を育てる方法を期待したい。さて美術をめぐるハードとも言うべきプロデュースする側について述べてきたがソフトである作家の側について考えてみたい。変動する沖縄の美術状況にあって、日展や外部からやってくる展覧会等を他者として捉え自らを批判的に語る事が共同体の閉塞的表現(言語)を超える、自らを外部として置くことができる可能性となるのであるがその動きがまるで見えない。既成のコードを破る、他のメディアまでも侵すことのできる作家がでてこないし、いわゆる「ローカルの美術」の中におさまっている作品展がほとんどである。

いずれにしろ沖縄でももやがて美術のスタティックな序列化とコマーシャルイズムが到来し、作家の理念と倫理が問われて来よう。

その時、批評や画廊は共同体に足をすくわれなくてグローバルな場所で力を発揮する作家に場を与えることができるであろうか。

(おながなおき=美術教諭)



新創 義和作品

日本セメント沖縄地区総代理店

カ 株式会社 **金城キク商会**

本社 那覇市西1丁目1番28号電話(0988)66-1101(代表)
中部支店 沖縄市宇松本1102番地電話(0989)37-0404(代表)

地元のビールが断然うまい。

最も新鮮

オリオンビール

見果てぬ夢とロマン

気概ある作家との出逢いを求めて

新川 美津 (ギャラリー・加ノミツ)

宮城 満寿子 (ギャラリー・宮城)

松岡 勇 (ギャラリー・茶絵羅)

上原 誠勇 (画廊 沖縄)

GV 今日はお忙しいところどうもありがとうございます。このところ日本の経済力に押されたせいか、世界中が美術ブームです。特に日本は美術ブームの真っ只中で、世界のマーケットに接近している感があります。それにたがわず沖縄も2、3年前から若干美術ブーム(?)の波にのってきていると思います。そのブームの後を受けていくことで、これからの10年の沖縄の美術界というのは大切な時期なんじゃないかなと思います。皆さんは地元で画廊をやっけてらされて、ある程度安定した時期に入ってきていると思うんですけど、今日は、そこらへんの画廊の立場と美術状況とを絡めながら、画廊を経営していっしやる皆さんに、語ってみたいと思います。

方針

GV まず各画廊の方針みたいなものからお話を聞かせて下さい。新川さんいかがですか？

新川 そうですね。私の場合は、画廊が芸術家のほとぼしる何かがやれる空間でありたいと願っているんです。絵画に限らず彫刻などもどんどんやっていきたいと考えています。それからコンサートもやりますね。ひとりの芸術家が1日だけでも何か新しいものを表現したいということでしたら、私はそれにも応じます。ですから私の画廊はこうじゃなければいけないという事はないんです。そういう場所を私はつくりあげたいと思います。つまりは多目的にホールを運営していきたいということですね。

GV かなり表現の間口を広くするということですね。松岡さんはどうですか。

松岡 うちの方針ねえ。やはりギャラリーというのはオーナーがいるわけね。オーナーの感性で自分が気に入ったもの、いいと思うものだけをピックアップしていきたい。ギャラリーとしては芸術品が

まだ大衆のものになっているとは思ってないね。ある感性を持って美術品なり芸術品だと受けとめた人しか買おうとしないわけだから。ギャラリーとしては、そう受けとめてくれる人に作品を持ってもらう。それがギャラリーの使命だと思う。そういうことで沖縄で美術に関心のある人とか、理解しようとする人たちのレベルが上がってくるんだと思う。あまり間口を広げても駄目だし、それとギャラリーで大事なことは生き残ることよね。自分が生き残る事自体、自分の感性を理解してもらえなければ経営としては生き残れないわけ、だから戦いでもあるでしょうね。もともとギャラリーなんていうのは自分で絵を描けないわけだし、作品を創ることもできない。だけど気に入った作品を展示することで、オーナーの感性を開放できるわけね。それを持って理解する人たち、つまりお客さんに殴込をかけていくというのが、ギャラリーの仕事じゃないかと思っている。だから真剣にやるしかないのじゃないかねえ。

宮城 すごい壮絶なご意見の後で私、しゃべりにくいなー。

GV 宮城さんはいかがでしょうか。



宮城

宮城 非常に経験豊かな松岡さんの発言を聞いて小さくなっているんですけど。私の画廊は企画と貸画廊の2本立てでやっているわけですが、今後は企画をもっと増やして絵画と陶芸にしぼってプログラムを作成していくつもりです。これからも県内作家を中心に、県外のすぐれた作家の作品展も年に4回は企画するつもりです。その中から作家達の交流をどんどん図りたいと考えています。たまたまスペイン旅行した際に知り合った作家の個展も来年は企画しているのですが、

将来は沖縄からも、スペインあるいは外国で個展ができるように、画廊がそのパイプラインの役目を果たせたらと大きな夢もっています。私が一周年に取り上げたのが沖縄初期の作家展でした。戦後の美術界の動向というのは、凄く目覚ましいものがあるって、沖展は沖縄の画壇の草分け的な仕事をやっているわけですよ。その先人達の足跡を辿ってみたいという、私のなかに彷彿としたロマンがあって、沖縄の美術界に影響を与えた物語作家の作品も毎年展示していくつもりです。温故知新と言いますが素晴らしい名作に触れて、それを若い作家達がどう転換しているのだろう、ということを知る上にも意義があると思うんですよ。

GV 上原さんは、いかがですか。

上原 そうですね。うちはまず美術品について沖縄にどういう作家、どの位の作家がいるのだろうかという関心、沖縄の美術品が売れないものかとか、あっちこっちで頻りに展示会はされているけれども、作家達は本当に作家活動ができるのだろうかとか、そういういろんな探りを入れながら画廊を始めました。もちろん美術品が好きでね。作家活動にも興味もありましたからね。また出来る限り美術品を日常のレベルにもっていきたい、という一心でやってきたんです。やはり考え方のメインは地元の作家ですがね。

問題点

GV 現在抱えている問題点について、お話頂けますか。宮城さんからどうぞ。

宮城 画廊の理想としては売れる作家、画廊と共に成り立っていく作家と売れない作家、例えば大きな彫刻をして売れなくても見せるための展示会ができる作家



新川



バームホルズコーポレーション



ヒューマンテックコーポレーション

代表取締役会長 高倉 文子
代表取締役社長 高倉 幸一

〒900 沖縄県那覇市久茂地3-29-56 Tel0988-61-7621

別荘地・これからは



琉球石油株式会社

沖縄県那覇市北山2丁目7番1号 TEL0980-66-2131

とのバランスがとれるような扱い方ができると理想的ですけどね。だからどこでお金を得て、どこでお金をロスするかなんですよね。

新川 それコントロールできれば、理想的なギャラリーだといえると思うんです。この人の作品は発表してあげたいというのは必ず出てくると思うんですよ。だから、その人のためにはお金を使わないといけない。その時のために売れる作家の場合はどんどん売る。そして買ってもらう、理解してもらうという立場に自分達は置かないといけないと思う。ですからある意味では画商つばい所もないとやっていけないんです。そして、このギャラリーからひとりでもいい、素晴らしい作家を送り出したいという望みを持ちます。うめぼれとかそういう意味ではなくて、ですからそういう意味では、まず運転資金というのもギャラリー側では消化しないとイケない。だから、ギャラリーなんです。ただの展示する場所だけじゃないんです。

松岡 僕自身考えるのは、なんで小さなスペインのカタルニアあたりから偉大な作家が生まれるのに、なぜ沖縄では出てこないかということなんです。素質はあるんですよ。気概がない、気概が。ということは自分たちは田舎者だと思っているんですよ。ニューヨークへ行って感心してきたり、東京に行って感心してきたりじゃ困るわけ、作家が。画廊は感心してもかまいませんよ、これは勉強ですから。作家というのは自ら創造者でしょう、破壊者であるかも知れないのだけれど。やっぱり自分がアーティストである以上、自分がビッグワンだと、沖縄でビッグワンじゃ困る、自分が世界に通用する作家の素質があるというそういう気概をもってやってもらわないと、どんなにやっつけてやはり沖縄からは世界に名を響かす作家は出てこない。だからまずそれを持ってもらいたい、逆にあえていえば沖縄の画廊じゃなくてもいいわけです。どんどんそういう作家が生まれてくることによって画廊も本気になって取り組まなければいけないことです。沖縄の画廊もね、そこで本当の意味での切磋琢磨が生まれるのだから。僕自身が不思議でしょうがないのは、なんだかんだいってもカタルニアも田舎ですよ。あそこから、どんどん偉大な作家が生まれているのに、なぜ

沖縄から生まれえないのか。どこに違いがあるのかそれだけです、悔しいのは。
新川 おっしゃる事は、わかりますけどね。沖縄では画家とギャラリーオーナーが一体になって行動したということが少ないんじゃないかと思えます。芸術家を本気にさせるという情熱をもって、我々が本気で当たったかどうか、アタックしたかどうか、相手を燃やせたかどうか。バルセロナの片隅で育った芸術家がいるのに、なぜ沖縄にはとおっしゃっているけど、彼らには凄いスポンサーがついて、現実に名を成している訳ですよ。だから三者一体になって初めて本当に成り立つものだと思うんです。ですから芸術家だからおごつてもいけないし、ギャラリー側がどうのこうのという事もないし、またスポンサー側からどうのこうのということもない。本当に三者一体になって素晴らしい作品が沖縄から出ていくんです。また芸術家としてもゆくゆくは残っていくんじゃないかと思うんですよ。しかし今はなんとなくアンバランスな、我々が作家にたいして非常に遠慮する部分もあるし、恐い先生方みたいな部分ももっていますから、正直いってまだまだギャラリーも成長してないんですよ。ですから私自身もその辺を研究して勉強の課題のひとつにしたいと思えます。三者一体となってやれば、必ずいい作家は沖縄からでてくると思います。



上原

上原 バルセロナとかヨーロッパのあーいう地域の話をして今ものところちょっと始まらないですよ。むしろ沖縄という地域のなかで本物の美術家が育つかどうか、育っているのかどうかなんです。というのは僕らがこういう仕事してきてね、本当に沖縄から誇れる作家というか、日本の文化圏のなか、あるいは東洋の文化圏のなかで、これはオキナワンというような沖縄で生まれ育ったちゃんとしたオリジナリティを持った作家を果たして僕らが見つけることができるか、育てることができるかどうか、そういう部分が大事だと思うんです。

松岡 とにかく、そういう気概を持って生きてる作家がいるかって事ね。どんなに才能があっても本人にその気がなければ

ばだめでしょう。相当熾烈な戦いになるはずですよ。ただ絵を描けばいいだけじゃなくて、ある程度本人のなかに野望がなければだめでしょう。積極的に動かなければだめでしょう。だからその中でやっていくためには、そういう気概を持った作家が生まれてこなきゃだめ。あと、それが世に出るかどうかというのは、今度は本人だけではだめだから、当然スポンサーも必要だし、また画廊も必要でしょう。いつかは出てくると思うよ、沖縄にも。



松岡

宮城 私は、これから沖縄のなかでそういう作家が、出てくるだろうということを期待しています。世界に誰か石を投げしてくれる作家が、ひとりでもふたりでもいるんじゃないかという願望を持って仕事しているわけです。沖縄には、それだけ資質の高い、レベルの高い作家はいると思いますよ。その内の誰が石を投げしてくれるか期待しながら仕事をしているんです。

状況

GV 沖縄の美術状況についての話をしてもらいましょうか。浦添美術館もできたとし、琉石美術賞、名護あけみお展、那覇市も企画したりして、ちょっと情勢の変化も出てきたんじゃないかと思えますが。

松岡 画廊が経営的な問題や、発表の問題でも苦労しなければならなかったのは公的な美術館がほとんどない状況だということです。確かに今少し出来てますけど、大きな目でみるとまだ、ないと同じ状況です。どうしても我々の小さな画廊が美術に対する啓蒙的な役割を果たした部分はあるんですね。これは画廊経営にとって大きなリスクなんですよ。本来ならばちゃんとした美術館が、県立、市立たくさんあって、一般の人たちがいろんな所でいい絵を観れる。そして機会も多い、そうしたらもっと活発に画廊活動が出来るわけです。だから沖縄の画廊の基盤がしっかりしていくまでにはまだまだ時間がかかると思います。結局美術関係の施設が完備してから、画廊がもっとやりたい事やっていくんじゃないか。



Kentucky Fried Chicken.

株式会社 リウエン商事
代表取締役社長 宮城 義明

〒901-21 沖縄県浦添市宇勢理客556番地 TEL (0988)75-2168

国家試験合格者輩出-No.1の総合コンピュータ専門学校

専修
学校

CSCコンピューター学院

那覇校 ☎900 沖縄県那覇市山下町103-1 電話(0988)59-0746
中部校 ☎904 沖縄県沖縄市宇室川11-10 電話(09893)8-1631

作家の方達にも、そういうことがネックになっているんじゃないかという気がします。これについては急いでほしいと思う。

宮城 確か那覇市民ギャラリーなどができて4、5年位になりますよね。浦添美術館だってできたんです。独自で予算獲得できて、企画が出来るわけだから本当にいいものを観せる、これは芸術だという、そういう企画をしてもらいたいと思いますね。美術愛好家にたいしてもそうですが、一般の人の資質を高めるという役割を果たすわけですよね。お金をどうせかけるんだから、凄い企画をたててほしいと思います。県の美術館もできるだろうと構想が練られているという話ですが、確かに時間はかかると思います。でも期待はできますよね。せつかく浦添市も作ったんですからね。年間の企画をもっと充実させて、地域文化にますます貢献してほしいと思いますね。

上原 時代的にはここ1、2年少しずつ良い方向に動いて来たんじゃないかって感じがしますね。でも僕が一番問題を感じているのは美術館の学芸委員が、まだ活躍していないんじゃないかということです。もつともつと研究を積んで活躍してほしいですね。ちゃんとした美術館の方向性と美術品に対する検証をですね。そして地域や時代を意識した企画をしてほしいですね。それと美術評論ですよね。本当に作家の思想や美意識と対峙した評論が出てこない。そこから辺が今後の大きな問題じゃないかと思っています。

宮城 それから県の美術館ができる構想があるんだしたら、中身を入れることをしないとイケない。まずコレクションを始めないとイケないわけですよね。おそろくぜんぜんなされてない状況だと思っんです。沖縄の作家の遺作なども遺族の方もどう管理していくか分からない状況なんです。何年後か構想があるのであれば、今から中身をコレクションしなきゃ

いけない。県の首脳の人たちや経済関係者の人たちは、もっと美術に関心をもったプレーンを育てるべきですね。

新川 浦添美術館みたいに箱はできましたよ、中身はどうしますかじゃ遅いんですよ。だから、企画ができないんですよ。せめて、沖縄県がこれから美術館を作るのであれば今から構想をもってほしい。

上原 今の今ですよ、遅くないですよ。結局は地元作家にも目を向けてないんですよ。顕彰はするんですけど、せいぜい画集作って偉い人でした、いい仕事をしました位で終わってしまうんですよ。県民の財産として残していくという意識がないですね。

松岡 芸術とか文化というものを育てて

いけないです。

宮城 展望ですか。やはり私も夢とロマンを追い求めて行きたいですからね。資質の高い沖縄の作家達が、いるわけですよ。だから沖縄から東京、沖縄からニューヨークと石を投げられる、発表できる作家が出てくることを望みます。また、そのパイプラインになりたいというのかな、県外の作家をこっちに呼ぶという展開をしていきたい。若い、これから巣立っていくであろう作家達と一緒に苦労していきたい、そんなところですね。

新川 これから先の展望ということですが、私は、まず身近な話から申し上げますね。来年の1月下旬から高田博厚さんの彫刻展をやりま。作品は35点。梱包など大変手間ひまがかかることす



いくという事を、知らないのかもしれない。特に美術品なんかはもらうものだと思っているんじゃないの、県や市は。

展望

GV そろそろ時間もなくなっていました。最後に皆さんの、今後の展望を聞かせて頂きたいと思います。松岡さんから、よろしくをお願いします。

松岡 厳しいんだけど、我々自身が頑張ることは、作家の方達が頑張ることと同じことですよ。先程の美術館でも先の長い話でしょうけど、せめて我々小さな貧乏画廊が意地でも続けていく、そこから初めて本当の意味での沖縄の美術界の展望が生まれてくるんじゃないか。その一役でもなれば、それが今後の展望であり、またそう思わないとやって

けど、この彫刻展をすることによって何かが残れば、それがいつ輝くか分からないけど、少しでも刺激になればという気持ちで企画を進めています。また今後も彫刻展を続けていきたいと思っています。そして沖縄の作家が近い将来、地球をキャンパスとして活躍するであろうと熱い眼差しと限りない夢をもち続けながら画廊として協力してい

きたいと考えます。

上原 うちが将来の展望とか抱負というのはそう変わらないですね。今まで抱えていた矛盾をこら辺で整理して、ある程度きちっと方向づけをしていこうという感じですね。アートビジネスとしてちゃんと成立させたい、公的機関やコレクターをどんどん発掘して売っていききたいという基本的な考え方なんですけど、なかなか思うようにはいかないです。それをまずベースにして、もうひとつは本当に沖縄でどういう芸術が可能かということを探って行きたい。

GV 座談会を通して、もう少し討論を展開したかったんですが、紙面も足りなくなりました。この次、突っ込んだ話ができたらいいと思います。今日は本当にどうも有難うございました。



沖縄で生まれた郷土の信販会社
沖縄信販
〒900 那覇市松山2-3-10 ☎(0980)61-1123 40
アートライフは、OCクレジットで。



“専門画材の店”
CULTURE PLAZA

株式会社 **みつや書店**

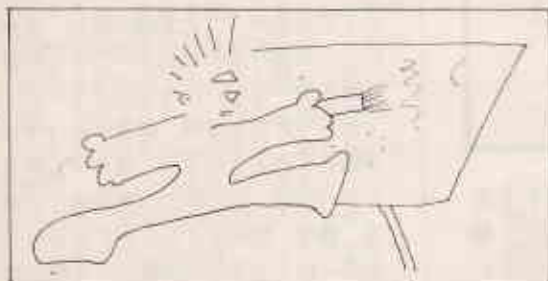
〒902 沖縄県那覇市壹屋1-1-3 ☎(0988)63-1650 40

私達の中には色々な自分がひしめきあっています。

ある時は歯医者者の私であったり、芸術家であったり、子供であったり、

日頃他人と話す機会がほとんどの私が、G・Vの紙面をかりて自分と、自分の中の他人、すなわち歯医者者の「Mr.HIGA」と、芸術家の「Mr.CHIHARU」の対談が実現しました。(以下Mr.H/Mr.C)

- Mr.H あなたとお会いするのは初めてじゃないような気がしますけれども、今日はよろしくお願ひします。
- Mr.C こちらこそ。
- Mr.H まず、あなたにとって芸術とは？
- Mr.C 退屈は病気であり、仕事はその薬であり、その薬が芸術です。
- Mr.H どんな種類の薬ですか？
- Mr.C 生きていくことと、生活すること、息をすること、感動することです。私達は、彫刻の様に生活を刻んでいくのです。そして彫刻の陳列室の様に、毎日を作品として残していくのです。私の体も世界のシェフ達が作った芸術品です。
- Mr.H 生きることが芸術そのものということですね。
- Mr.C そうです。作品としての芸術を作るのではなく、生きていくことが芸術作品ということですよ。
- Mr.H 芸術に才能は必要ですか？



- Mr.C 才能とは、神様から秘かに与えられ、しかも私達がそれとは知らずにいるものですから、自らは気がつくものではありませんよ、つまり、才能がないと感ずることが才能なのです。幸福とは幸福をさがすこと。才能とは、才能に気がつかないことです。そして、才能とは天賦のものであり、技巧によって表現できるものではありませんから。
- Mr.H ないよりはあった方がいい程度のものでしょうか？
- Mr.C そうとられても結構ですし、別の言い方をすれば 解答を出すべき問題ではないのでしょうか。
- Mr.H 芸術家にアイデンティティーは必要ですか？
- Mr.C 芸術家に限らず、歯医者者のあなたにも必要です。私の好きなコクトーの言葉をもって返答とします。「一人一党だ、一人がオレの党だ。大事な自分をなくしたら党もへったくれもない」。
- Mr.H 最近は美術ブームといわれますが、ブーム・流行とは？

- Mr.C 流行すなわち、新しいものとは忘れられていたものです。流行はくり返すわけですから。
- Mr.H それでは最近の画廊ブームについてはどうお考えですか？
- Mr.C 金がさらに金を生み出し、成功は成功をもたらす。画廊は、画廊をもたらしたということです。
- Mr.H 画廊に望むことは？
- Mr.C 私達は、画廊と芸術家と大衆という三角関係を保っています。大衆が、すばらしい芸術家をつくっていただける様に、その出会いの機会をたくさんつくってほしいと思います。そしてあわよくば21世紀は長者番付の上位に顔を出してほしいですね。
- Mr.H 画廊での商売は贋作というリスクがつきものですが、あなたは贋作についてどう考えますか？
- Mr.C ピカソが絵を描いていると、友人が入ってきて、「すばらしい絵じゃないか、完成したら是非私にゆずってくれよ」と言ったそうです。するとピカソが、「これはつまらない絵だ、にせ物だ」というと、「真正正銘のピカソが描いているのに、にせ物なのか」と友人がびっくりして問い返すとピカソは悠然として、「私にだって贋作を作る権利はあるだろう」と話したそうです。私が言いたいことは、本物、にせ物という騒ぐ人は、その作品に価値を見出しているのではなく、その作品に対してあたえられた金額に価値を見出しているのです。1円でも高いものはあるし、1億でも安いものがあるというのが、私の答えです。本物にせ物ということは問題にしない絵画こそが、ある意味でいえば偽りのない世界かも知れません。それでは私にもあなたに質問させてください。歯医者者と芸術家の違いは？
- Mr.H 歯医者者は国家試験があり、免許制度がありますが芸術家は自己申告制ということですよ。その気になれば誰でも今日から芸術家ということですよ。最後の質問、あなたは死んでから自分の墓碑銘になんと書きますか？
- Mr.H 「芸術家でもない、歯医者でもない男ここに眠る、彼は一生自分がどちらか、決めかねていた」という言葉です。今日はとにかく疲れました。自分がどちらなのかさっぱり分かりません帰ってて寝ます。ありがとうございました。(歯科医)

「あなたとわたしはだん」

比嘉 千春



ダイキン冷暖房機特約販売店/那覇市給水・排水設備工事指定店

南西空調設備株式会社

〒900 那覇市泉崎2-2-3 ☎(0988)34-7831(代) FAX(0988)34-5348

國場組グループ

國 和 會

会 長 國 場 幸 昇

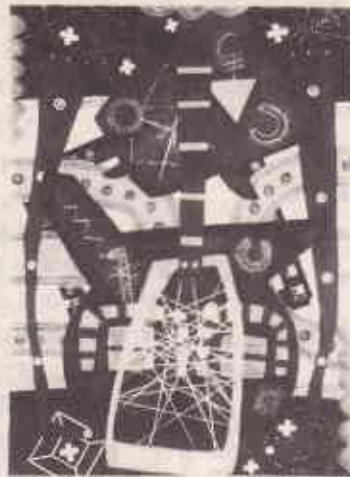
ニューコンセプトギャラリー

GALLERY WORK-II オープン

画廊沖縄では創立10周年をステップとして、もう一つの企画画廊GALLERY WORK-IIをオープンすることになりました。これまでの居住性を意識したサロン調の空間から、今日的作家の現代アートにも対応できるような、シンプルな展示空間を考えました。国内外の巨匠の質の高い作品からアーティストスピリットに満ちた地元作家の作品まで、幅広く芸術性を保った企画展の展開を願っています（場所は現在の画廊沖縄の1軒右トナリ）。画廊沖縄共によりしくお願いします。



ルオ「ミゼレ」No.52



幸地 学作品

— GALLERY WORK-II 企画予定 —

◆G・ルオ展

1990/12月3日(月)～11日(火)

◆M・シャガール展

1990/12月14日(金)～22日(土)

◆幸地 学展

1991/1月14日(月)～26日(土)

ギャラリーマン

今、芸術家のテーマ

先頃、車椅子の天才ホーキング氏が、来日し話題となった。彼の有名な著作の中に、人間原理の宇宙論がある。それは、「我々が存在するゆえに我々の宇宙がこのようなかたちである事を知る。」と言っており、人間はそれを認識できる知的生命体であり、宇宙はその知的生命を誕生させるのに、極めて都合よくできているというものであった。地球は、宇宙の絶妙なバランスの上にあるのである。しかし人間は、14～16世紀に興ったルネッサンス以降、神を中心とした社会から人間中心の社会へと変化し、17世紀の産業革命を境に現在まで、文明進歩の反面、自然破壊を続けてきたのである。その結果、地球は現在、環境汚染によ

り瀕死の状態となっている。それに目覚めた今、我々は地球と一体となっており、個人個人が行動を起こさなければならないところに来ている。そして、芸術家にとって、それは最大のテーマになるのではないだろうか。「今の哲学が科学に追いつけないでいる。」と、ホーキング氏は言っているが、宇宙の謎が加速度に解明されてゆく今日、美術家は、個人的な意識下のイメージによるオリジナリティだけにどまらず、地球規模、宇宙規模で、現代の問題を表現し、21世紀に向け、なんらかのメッセージを我々に提示してほしいと思う。そして2年前に開催されたアパルトヘイト絵画展の様なかたちで、環境問題をテーマとした絵画展があってもいいのではないだろうか。特に、ここ沖縄においては、
(長嶺 豊)

時代と芸術

1990年も残り1ヶ月を残し、秒きざみ

で新しい年へ突入という慌ただしい昨今である。1990年の幕開けは、中国の動乱から飛び火して東ヨーロッパの民主化へと激変し、それにともない長年続いた米ソの冷戦時代から一変して、協調、対話を現実的なものへと実感させてくれた。さらに今日まで機械文明を支えた石油が地球規模の自然破壊という大きな問題を投げかけるなか、イラクのクウェート侵攻による人質問題と石油問題をかかえながら、新しい年を迎えようとしている。これらすべてが時代の象徴であり、平和、人権、環境が、人類の大きなテーマとして提示されている。これらは21世紀につなげる為に解決すべく、問題を投げかけているように思える年であった。こうした時代の流れはこの沖縄にも大きなテーマとして迫っており、21世紀につなげる新しい意識の構築が必要ではないだろうか。その為には歴史、民族、美術の各美術館が、この沖縄に歴然として必要であり、これらの機関が広く一般に波及し認識することによって新しい文化が構築されてくると思う。さらにこれらの機関と教育がうまく運動する事によって未来ある子供たちが、文化意識の高い、世界観に立った誇り高いウチナンチュを育てられるのではないだろうか。ヨーロッパで始まった民主革命、産業革命は今日の沖縄をも支えているが、我々が忘れてならないのは、その時代の芸術家たちが反発、融合、提示をくりかえしながら今日のヨーロッパ文化の構築と、文明に寄与している事をもう一度認識する必要があるのではないかと。
(豊平 秀樹)

編集デスク

初めての試みではあったが、市内の画廊オーナーが集まった。経営のこと、画家のこと、評論のこと、美術館のこと、マスコミのこと……美術界を取り巻く環境があまりにも出来上がっていないことを確認した。大分オフレコになったが、各人とも手厳しい発言があった。裏を返せば商売ガタキなのだが、何よりも嬉しかったのは言葉ひとつで「沖縄にいい美術の時代を創ろう」が共感された。G・ボイス君も2歳になった。来年こそは、より内容のある紙面を目指したい。読者からの投稿も待っています(上)。

* 額縁の専門店 *

合資会社 前田額装商会

〒900 那覇市松尾2-7-29 ☎(0988)67-4811 FAX(0988)61-0367



絵画(油彩・水彩・版画)の専門店

画廊沖縄

〒900 沖縄県那覇市泉崎2-2-3 ☎(0988)34-6760